パリ・オリンピック 2024 が終わり考えたこと

２０２４年９月
久米五郎太

この夏はオリンピックをテレビ・新聞そしてネットで追っていた。４月に「パリ二十六景」を出版し、そこで触れた最近のパリやフランスの状況をパリがホスト・シティとなったオリンピック/パラリンピックの準備と運営、競技のなかに見ようとした。

フランスで最大の読者数を持つルパリジャン紙を中心に、フランス・テレビやルモンド紙などのオリンピック報道にこまめに目を通した。開会式・閉会式は明け方の時間帯だったが、両大会ともＮＨＫの中継を見、日本選手の活躍した実に多くのオリンピック競技を中継や録画で楽しんだ。

一人のオリンピック好き、かつフランスを研究する者として、ホストをしたフランスに重点を置きいくつか考えたことを述べたい。

１フランスはホスト・シティとしてよくやったと思われる。

（１）緊張した国際情勢の中で、治安維持に十分な対策を講じたことが奏功し、テロリズムは発生せず、死傷者が出る大きな事故は起きなかった。

主競技場があり選手村も置かれた、サン・ドニとその周辺では９年前の２０１５年１１月にイスラム過激派ＩＳによる二度のテロが発生した。１３０人の市民が死亡、負傷者が３００人を超えるという大惨事だった。

オリンピック聖火は５月８日にマルセイユに上陸し、約二ヶ月半の間１万人による国内リレーが行われた。その間、そして大会が近づくのに合わせ、フランス政府はパリを中心に段階的に警戒を強化し、厳しい交通規制も行ってきた。しかし、７月２６日の入場式当日は早朝に地方３箇所の新幹線電気設備に放火があり、人身事故はなかったがパリと地方の間の運行が大きく乱れた。治安当局や大会組織の関係者は極左勢力によるサボタージュだとし、警備が一段と強化され、高い緊張感の中でセーヌ川を使った雨の中での開会式が行なわれた。幸いにオリンピック、パラリンピックの両大会期間中は安全上の大きな問題が起きず、９月８日のパラリンピック閉会式も終わった。９月１４日にはオリンピック・パレードがシャンゼリゼで行われ、一つの区切りがついた。

この夏はウクライナのロシアに対する越境攻撃、イスラエルによりガザ攻撃継続（ヒズボラへの攻撃）など国際情勢は緊張度を増した。しかし、大会運営上はロシア・ベラルーシからの参加は中立国枠での選手３０人強に抑えられていた。危惧されたイスラエルとアラブ諸国との関係は、選手団やサポーター同士の衝突は見られず、選手による政治的な意見表明や明確な対戦ボイコットもなかった。観客も節度を持っていたといえよう。

開会式のピーク時には警察・憲兵隊・消防、軍隊の治安部隊が合計４万５千人動員され（大会期間中に軍隊はヴァンセンヌの森に１万人程度駐屯)、厳しいチェックを経て数万人の民間のガードマンも雇われた（暫定内閣のダルマナン内務大臣談)。国とイルドフランスなどの都市圏、パリ市、その他のコミューンが連携をとった警備を行い、周辺の欧州諸国やカタールからの治安要員派遣も受け入れた。危険人物の予防的拘束もかなりの数に上ったようだ。

直前に世界規模でコンピューター・ソフトの不具合が発生し（フランスはその影響が少なかった)、大会期間中もサイバー・アッタクが相当数あり、ドローンによる攻撃も企てられたかもしれない。大きな被害や障害が起きたという報道はみられない。雨の中でのダンスなどのパフォーマンスでの転倒事故もなかったようだ。リスクをとったフランスに幸運の女神が助けを伸べたのかもしれない。

（２）ホスト・シティとして、整った競技施設を準備した。

３１の競技施設のうち新設は５％、パリ北部に位置するサン・ドニ地区の水泳プール（アクアティクス・センター）とポルト・ド・ラ・シャペル地区の多目的スポーツ・センター（アレーナ）の二つが新たに建設された。メインの競技場はサンドニのスタッド・ド・フランスー１９９８年のワールドカップ・サッカーの際に建設された競技場が改修され、フィールドはモーブ色（藤色）に新しくなったーが両大会の閉会式や主に陸上競技に使われた。全体として９５％は既存設備を改修し、また大きな広場に仮設設備が建てられた。

東京オリンピックの時は札幌などの地方会場を含め４０の施設を使用した。パリ大会でもパリとサン・ドニの施設を中心に、サッカーなどはリール、リヨン、ボルドー、マルセイユなど地方の設備も使い、ヨットはマルセイユ、サーフィンは太平洋のタヒチの海岸が会場となった。

競泳会場となったラデファンスのプールが旧基準適合の水深２.２メートルだ

った、シャンドマルスの仮設の柔道場の畳の床が柔らかったなどと伝えられた。それらは主催者（各競技の統括団体）の承認を得たものであろうし、国際大会ではこの種の問題がつきものであろう。

コンコルド広場やシャンドマルスの会場は、仮設とはいえ極めて規模が大きく、万を超える観客を収容するなど、フランスのこうした建設分野での技術水準の高さに感心させられた。

（３）他方で、問題が指摘された施設がいくつかあった。

１万人を超える選手団のためのオリンピック村はサンドニの川沿いに新設されたが、地下水を使った冷房システムを採用したこともあり、部屋が暑く、ベッドが硬いのでよく眠れないとの不満が出たようだ。村の内部はマスコミに公開されていないので詳細は不明だが、国や選手によっては独自に個別の冷房機器を持ち込み、エアコンのある町のホテルを使った例もあるらしい。

パリの７月の最高気温は平均２６度、８月は２５度である。熱波が到来することもあり、最近は多くの家や施設にエアコンが備え付けられているが、今回も数日の間は３０度を越え、地下水冷房での対応では不十分だったのだろう。選手の移動用に用意した９００台のバスにはエアコンがついてなかったらしい。段ボール素材のベッドは日本のメーカーが、当初被災者用に開発し、東京大会に引き続き今回もそれが使われた。

食事の面では、高カロリーの肉食を求める選手に不満があったと聞く。最近のフランスは地球温暖化や健康対策の観点から食事の低カロリー化（例えば、牛肉から鶏や魚へ）や野菜摂取の増加が進んでいる。食堂を含めたファシリティ・マネージメントを受託したＳＯＤＥＸＯ　ＬＩＶＥ社は国際的な経験が豊富なフランス企業だが、オリンピック村の運営は勝手が少し違ったのかもしれない。プラステック容器が禁止され、テレビで見た選手たちは揃いのポットを持っていた。

この辺の問題はフランスの最近の事情やオリンピックでの持続性重視を知っていればある程度は予想がついたであろう。それなりの対応もなされ、3 食とも日本食を食べていたという選手もいる。近年はサッカーでもアウェイだと相当の対策をする。戦争中に日本軍が従分な準備もなく戦地に乗り込み、苦しんだ頃とは時代が全く異なろう。

トライアスロンやオープン水泳で使われたセーヌ川の水質は問題がなかった

のだろうか。7月中旬には基準を満たしたとして、オリンピック大臣、その後１７日にイダルゴ・パリ市長とエスタンゲ組織員会会長がセーヌに飛び込んだ。日に２回行う検査結果の公表がいつの間にか止み、競技に参加した選手の中に体調不調を訴え、入院するケースが出た。オリンピックでの利用を念頭にパリ市と国とが浄化設備に多額の資金を投入してきただけに無理をして使用したのかもしれない、実態はどうだったのか。来年には一般市民にセーヌ川での水泳を認めるらしい。

（４）一度に大量の人の移動を伴うオリンピックでは交通の問題が要となる。温暖化対策の観点から大会中の自動車利用を減らすべく行われた地下鉄１４号線の延伸は大会開始に間に合った。

北は終点になるサンドニまで伸ばされ、地下２８メートルにホームがあるガラス張りのサンドニ・プレイエル駅が日本人建築家隈研吾の設計（２０１３年のコンペで受注）により新設され、6月２４日に開業した。南はパリ郊外のオルリー空港駅まで延び、空港利用客は実に長い年月不便に甘んじてきたが、やっと乗り換えることなく一本の地下鉄でパリ市内・サンドニと往来できるようになった。

パリの地下鉄は総じて古く、階段が多く、歩く距離が長い。足の弱った老人や身障者はバスを利用するわけである。しかし、ずいぶん前から自動運転の路線もできており、この最新の地下鉄１４号線はバリアフリーである。東京メトロと比べてどうなのか一度見てみたい。パラリンピック終了後しばらく夜間は閉鎖するので、その間に何らかの手直しがあるのかもしれない。

サルコジ大統領の時代に策定されたグラン・パリ計画は、パリ市内を走る地下鉄を郊外にまで延伸し、６０を超える駅を新設する（現在はＲＥＲ が郊外とパリ市内を結んでいるが、カバーする地区が限られている）という壮大なものである。やっとその一部が完成したわけだがーサン・ドニ・プレイエル新駅は最近シャトレーグランパリ・レアール駅と名前が変わったー、オリンピック期間中にパリとイルドフランスの地下鉄・郊外線（RER）の利用客数は大きく伸びたとすでに発表されている。当初はオリンピックの観客は無料だと言われていたが、建設費用の一部は利用者が料金の形で負担するというごく普通の形となった。大会用の特別割引チケット発行と期間中の高めの料金設定、終了後に行われる地下鉄とＲＥＲとの通しの料金設定など、プライシングの工夫が注目される。

２オリンピックはＩＯＣ（国際オリンピック委員会）が主催し、各競技はＩＯＣが承認し、そこから委託を受けた国際的な競技統括団体（ＩＦ）が運営し、ホスト国（組織委員会、ＮＯＣ、 各種の競技団体）はそれに協力する。その関係はどうだったのだろうか。

（１）国際競技統括団体は、各競技のルールを制定・改正し、自らがワールドカップのような国際競技を主催し、審判を出すなどその運営を行う。4 年に一度のオリンピックでもそうである。他方、ホスト国は競技場や施設を準備する。実際に大会で使用する様々な器具、用具は団体自身が調達するようだが、そのあたりは詳しくない。ホスト国は全種目に参加するので、国際基準にあった設備や器具・用具の準備に特段の問題はなかったと思われる。審判も団体が選ぶのでホスト国が特に多く派遣するということはないようだ。

３０を超える国際的な統括団体は、定期的に行われる国際大会の結果をもとにポイント制で世界ランキングを発表し、これが多くの場合オリンピック予選、足切りの役割を果たす。ゴルフでも世界ランキングが選手を選ぶ際の基準になっている。

統括団体はオリンピックの基礎が作られた２０世紀前半（一部は１９世紀終わりに）にヨーロッパで設立されたものが多く、本部を大陸の西ヨーロッパ、中でもＩＯＣ と同じスイス（ローザンヌ）に置くところが多い。主要な団体は、水泳・馬術、バレーボール、フェンシング、レスリング、ボクシング・ホッケーなどはローザンヌ、陸上はモナコ、体操はベルギーのリエージュ、自転車はスイス・エグル、バスケットはスイス・ジュネーブ、サッカーはスイス・チューリッヒである。少し違う場所としては、柔道のブタペスト、バドミントンはクアラルンプール（数年前にイギリスから移る）、ロス五輪で採用されるクリケットはドバイである。ラグビーや庭球はロンドンである。長く勤める会長の住む国に本部があるところもあるようだ。

今回のオリンピックのボクシング競技は東京大会に引き続きＩＯＣが主催したことが話題になった。国際ボクシング協会（ＩＢＡあるいはＡＩＢＡ、現在トップはロシア人）は、２０１９年に運営上の問題やコラプションが原因となりＩＯＣ から統括団体としての承認を剥奪された。そのためのいわば臨時的な措置である。

オリンピックではアルジェリアの女子ボクシング選手が金をとった。ＩＢＡは

昨年の世界大会でこの選手は女子としての選手資格がないと認定していたが、今大会ではＩＯＣ がパスポート記載の通り女子であるとして競技への参加を認めた。何をもって女性と認めるか、あるいはそれとの関連でトランス女性は何歳以前（例えば１５歳）なら認められるかなど、医学だけでなく社会の認識やより広く人間のあり方が判断にかかわる。米欧とその他の国々、ＬＧＢＴＱを認める国とそれ以外などで判断が分かれることがありそうだ。

国際競技への参加国や参加者が増えるにつれ、ルールの明確化や変更、審判の育成・質の向上が求められ、その中で統括団体の役割がより重要になっている。発祥国や伝統のある強豪国は昔からのルールを守ろうとし、後から追う国は自分たちに有利なように改正を働きかける。柔道の発祥国であり、１９６４年東京大会でオリンピック競技に加えることに貢献した日本は、レスリングに近いようなしっかりと組まない柔道が世界的に普及する中で、ルールの変更や審判の質の問題に悩まされている。競技人口は今やフランスの４分の一に過ぎなくなったとはいえ、日本は国際柔道の普及の面で固有の役割を期待される。

体操の女子床での３位をめぐる混乱は、不満とする国からの訴えがなされ、スポーツ裁定裁判所（ＣＡＳ、在ローザンヌ）の決定が数日後に出て、国際体操連盟はそれに従った。

サッカーではＦＩＦＡ（国際サッカー連盟）のメンバーたる幾つものクラブが傘下の日本選手たちのパリ・オリンピック出場を認めなかったというケースが出た。オリンピック選手がほとんどプロ化した現在、既存の集客力の高い世界大会をもつ競技団体とＩＯＣ の関係は難しいものがある。オリンピックが最高峰でない競技がサッカー、ラグビー、庭球などいくつもある。

ドーピングをめぐる問題は今回表に出てこなかったが、ロシア選手団の参加が少なかったためかもしれない。ドーピングの検体採取、選手の監視のためにパリでは千人以上が動員された。オリンピックだけでなく、パラリンピックでも疑いがあるとの報道がある。

（２）ＩＯＣはこの数年、兎角の批判を招いた誘致合戦や巨大施設の建設を避け、過度の消費や浪費を行わない、時代にあったものにする方向に舵を切った。２０２１年３月の東京大会前には「アジェンダ２０２０＋５」という提言を定め、持続性、多様性、包摂性、財政的な強靭性など新しい方向がそこに盛り込まれた。東京大会、北京冬季大会では思い切った改革ができなかったが、オリンピックを

提唱し、１世紀ぶりに開催するフランスにＩＯＣは改革の面で多くを頼った。大胆に町を舞台とした大会運営をしたフランスはそれによく応じたように思われる。

開会式の２週間前にＩＯＣバッハ会長はルパリジャン紙などにメッセージを出した。「全てが用意されており、『より若く、よりインクルーシブ（包摂的）で、より都会的で、より持続的な』オリンピックが皆さんを待っている」『男女のパリテ（対等）を重視した大会になるー選手の数もほぼ同じで、男女混合競技をさらに二つ増やし２０にし、マラソン女子を最終日に（また閉会式直前は女子バスケ決勝戦）行う』。９日の深夜の市民ランナーによる「みんなのマラソン」など、観衆の皆さんも参加することが可能なオリンピックだと付け加えた。

オリンピアンとしてのバッハ会長の同じオリンピアンとしてのエスタンゲ会長に対する信頼は高かったように見える。フランス国内ではマクロン大統領がオリンピックを重要視し、総選挙後首相が決まらない中で、政治休戦だとして暫定内閣にオリンピックを運営させた。国は契約の上では財政保証をする立場にすぎないが、国の組織委員会やパリ市に対する支持が非常に強かった。

東京大会を思い出すと、札幌でのマラソン実施の件などで、組織委員会、東京都と主催者ＩＯＣ との間でタイミングの良い意見交換が難しかったことが報道された。地理的事情や緊密な人的関係の不足が関わっているのかもしれない。準備段階で首相交代があった政府と東京都の間の連携も今ひとつに見えた。日本側での決定過程における男女対等の欠如や演出面での多様性尊重への配慮不足が次々と表面化したことが、ＩＯＣと日本側の相互信頼を妨げたと思われる。有観客での大会実現を強く望み、かつ変わろうとするＩＯＣやバッハ会長に対する理解が日本側に不足していたかもしれない。

大局的に見れば日本側は多大の資金負担をしたが、大きなバブルを作ってCovid１９対策を成功させ、無観客にもかかわらず様々な面でおもてなしの精神を発揮したオリンピックを無事にやり遂げた。このことは、国際的にもっと評価されても良かったと思われる。それにしてもCovid１９に振り回された東京２０２０はやはり運に恵まれなかった。

（３）パリ２０２４は５年前、２０１９年のＩＯＣのペルー・リマ総会でロスアンジェルス２０２８と同時に決まった。その時のフランスの招致プレゼンテーションを改めて眺めてみた。長く誘致にあたってきたラパセ氏が司会をし、男女

のバランスが取れたチーム（キャプテンはオリンピアンであるエスタンゲ氏、次がイダルゴ・パリ市長）がパリの街を舞台にオリンピックを運営するという方針に基づく、施設・交通などの計画を、主に英語でフランス語も混ぜて説明する。メンバーの中には、アルジェリアやグアドループ出身の選手がいるし、政治家はスペイン語も話すパリ市長（社会党）、イルドフランス地域圏議会議長（共和党）に混ざり、２０１７年に就任したマクロン大統領（中道派が母体）の姿もあった。

ＩＯＣの第一言語は設立の経緯からしてフランス語、英語は第二言語である。ロンドンに負けた２００９年のシンガポール総会ではフランスはフランス語主体でプレゼンをし、シラク大統領はいささか尊大に映った。しかしリマでは英語を使用し、フランスが変わり、新しい形のオリンピックを行おうとする姿勢をＩＯＣ委員たちに感じさせたであろう。

カヌー・カヤックで三度金メダルを取ったエスタンゲ氏は、プレゼンテーションで sharing(partage、分かち合い)は、普通は何かが小さくなっていくが、スポーツでは一緒にやると輪が広がるという話をする。最後に、カヤックのフランス・チャンピオンであった兄をある時トニー（自分）が破り、兄弟の仲が一時危うくなったが、兄はやがてコーチとして自分を支えてくれたという個人的な逸話にも触れる。この Paris 2024 Candidate City Presentation（YouTube）は実によくできており、今の、新しいフランスをよく表している。

エスタンゲ氏はその後組織委会長になり、フランス企業や政府、パリ市との協力体制を作り、長い時間をかけて夏季大会開催の準備を進めてきた。現在４６歳、フランス人らしい慎み（Pudeur）を持ち、英語も達者で、よく考えた表現でプレゼンテーションをする。

開会式の挨拶ではフランス語に一部英語を混ぜて挨拶し、まず『アスリートの皆さん』と呼びかける。『フランスとオリンピックはお互いに愛し合っている』『フランス人は愛する時には深く愛する』。そしてともに招致活動をし、昨年５月に亡くなったベルナール・ラパセ・元フランスラグビー連盟会長の言葉を引用する。『ラグビーはボールを自分だけで持たず、パスしていく』、『スポーツは喜びを人に広げて行く』。

閉会式でバッハＩＯＣ会長は、フランス語と英語で挨拶し、エスタンゲ氏に答えるように、『親愛なるフランス人の友人たち、あなた方はオリンピックを愛した。私たちはみなさん全てを愛する』と最後を結んだ。

エスタンゲ氏は普段はシャツ姿で、自転車に乗ってパリの中を動きまわって

いるらしい。大会期間中のある 1 日の記事を読んだが、この期間中は車を使って何ヶ所もの会場に行き、活躍したフランス選手に会うなど、実に多忙で、ホテルに戻ったのは深夜、それからルームサービスをとる。マスコミに出てくる本人はスポーツマンらしく、好感を持てる。しかし、昨年、官が関与する組織委員会会長としてフランスの法律上の規定を超える収入を得ており、本人の関係会社が縁故で契約をとったとの嫌疑で捜査を受けた。日本に比べてフランスの組織委はガバナンスが効いているように見えるが、どうなのだろうか。

３オリンピックは何のために？

（１）国際的な貢献とプレステージ

オリンピックをなぜホストするのか。主要国とその首都にとってオリンピックという大規模国際行事（メガイヴェント）をホストすることは国際的な貢献であり、成功させれば国際的なプレステージが上がる。

今回の夏季五輪は３３回目である。パリにとって１９００年、１９２４年に続く３度目の開催だったが、前回からは実に１００年が経っている（なお、冬季五輪のフランス開催は第一回シャモニーからすでに３回、４回目を３０年にフランス・アルプスで開催の予定）。フランスは１８９４年に教育者であるクーベルタン男爵が古代オリンピックの復活をパリで訴え、その後第二代ＩＯＣ会長としてほぼ３０年にわたってオリンピックの基礎を作り、発展させてきた歴史を有する。そうしたフランスにとって、今回のパリ・オリンピックを成功させようとする意欲は非常に強かったであろう。

夏季五輪の開催では、ロンドンはすでに３回と最多を誇っている。１９０８年、１９４８年、そしてフランスとの誘致競争に勝った２０１２年である。東京は１９４０年開催を戦争が近づく中で返上したので、実際に開催したのは１９６４年と３年前の２０２１年の２回。アメリカは過去４回開催、４年後２８年に開催予定のロサンジェルスにとってはそれが３度目になる。オーストラリアはメルボルン、シドニー、そして３２年のブリスベン開催が国として３度目になる。ドイツは１９３６年のベルリン、７２年のミュンヘンのあと、しばらく空いている。

要した費用はロンドンと東京とが約１.５兆円と言われ、パリ大会ではそれを少し下回る計画だが、最終的に更なる増加がありえよう。インパクトを論じる場合、どこまでをオリンピック費用と見るかによるが、収支という点では今回は入

場券販売が過去最大、かつ企業からの協賛金も多いので、政府からの補填はかなり限られるのであろう。財政的に成功と言えそうである。

マクロ経済への影響は、フランス政府機関の見通しによれば期間中の７－９月が年率０．３％のプラス、次の第四四半期は－０.１％となっている。観光収入の増加やビジネス面での好影響は今後現れてこよう。

（２）オリンピックは各国にとって自国のスポーツ面での実力を見せる機会でもある。特にホスト国ではそうである。事前には半分ほどはオリンピックに興味がないといっていたフランス国民だが、競技が進むにつれて選手の活躍を応援し、メダルの数が増えるのを大いに喜ぶ。国旗が掲揚され、国歌が流れる金メダルの獲得は国民にとっても誇りとなり、強化や派遣の費用を出す政府はその効果に関心を持つ。

結局、個人や団体の競技成績の総計、つまりメダル数が国の力を示すことになる。かつてはソ連や東欧（特に東ドイツ）そして中国の選手は国の支援や関与が極めて強く、成績に拘り、ドーピングも厭わなかった。ソ連解体と東欧の体制移行以降はこうした傾向は薄らいだようだが、今回はどうだったのだろうか。

過去に組織的にドーピングしたロシアはごく一部の選手しか参加しなかったが、米国議会が問題視する中国の水泳選手２３人のドーピング疑惑は東京大会に引き続き今回も問題なしとされた。フランス政府は人手を増やし各選手から検体を取り、ドーピング検査に回しており、その結果は今後発表されるのであろう。

金メダルの数では米国と中国とがトップを争う。今回は、中国が東京大会と同じようにある段階まで米国を上回っていたが、陸上が始まる後半には米国がトップになり、一時逆転されたが米国は最終日の女子バスケでフランスに辛勝（優勝）し、追いつき、両国共４０でトップに並んだ。銀・銅を加えた合計では、米が１２６、中国が９１である。

日本は金の数が２０の第３位、合計４５と海外の大会ではこれまでの最高だった。ロシアの本格的な参加がなかったこともプラスに影響したであろう。なお、自国開催の東京大会での金２７、合計５７と比べるとメダルの数は少ない（パリ・パラリンピックでは金１４の 10 位)。続いて第４位は、金１８のオーストラリア。

ホスト国フランスは、前半は快調にメダルを増やしたが、体操やレスリングの

多い中盤・後半に日本に抜かれ、最終的には金１６個の第５位、合計は６４個全体の４位となった。最後まで優勝を争った種目も多く、銀の数も２６と多い。目標とした５位以内に入り、ホスト国の面目を保ったと言える（パラリンピックでも目標８位を達成、金は１９）。日本の場合もそうであったが、強化のために外国のコーチの採用も行った。

日本ではほとんど知られていなかった水泳のマルシャン選手が一人で金４を取った。団体球技でも金２（男子七人制ラクビー、男子バレーボール）、銀５（サッカー男子、バスケ男女、ハンド女子、三人制バスケ男子）など、東京大会同様に多くのメダルを取ったことも注目される。柔道団体混合決勝の対日本戦での勝利も特記される。

これはフランスにとって戦後の大会では最高、そしてヨーロッパ諸国の中でトップの成績である。フランス国民の喜びは大きい。オランダが金１５、英国は一時フランスを上回っていたが最後は逆転され金１４（合計ではフランスを上回る）、その後に韓国金１３、イタリア金１２、ドイツ金１２と続く。

なお、参加２０６国・地域のうち、９１の国・地域が一つ以上のメダルを取った。人口の多い国ではインドが７１位、金ゼロ合計６、インドネシアが３９位、金２合計３、ブラジルが２０位、金３合計６である。一方、アフリカの小国ボツワナは男子陸上２００米で金、男子４００米Ｘ４のリレーで銀を取り、５５位であったのは、かつてアフリカについて大学で教え、この国とも付き合いがある私として嬉しいことである。

ニューヨークタイムズは金銀銅のメダル合計数のランキングだけを掲載していた。それだと、米が１２６で圧倒的な１位、以下、中国９１、英国６５、フランス６４、オーストラリア５３、日本６位４５、イタリア４０、オランダ３４、ドイツ３３、韓国３２の順で、これらがベスト 10 位を構成している。

国毎のメダル獲得数を競ってはならないという一種のルールがＩＯＣ にはあると聞いた気がするが、国の総合的なスポーツ力を知り、財政資金使用の成果を見るためにメダル数に関心を持つのは、時代の要請として避けられない。

（２）ホスト国はオリンピックを通じて、メガイベントの組織力と共にその国の社会や文化を示す。特に開会式は時間が長く、選手や観客、世界中のテレビの前の視聴者を楽しませつつ、自国の歴史や文化を紹介する絶好の機会となっている。

今回は、選手団は数多くの船に分乗し、オステリッツ橋からイエナ橋まで６キロを移動し（入場)、そこで下船した選手たちは、シャンドマルス（エッフェル塔がある）のセレモニー会場に入った。その間にセーヌ河畔の橋、河岸とそこに立つ建物そしてその屋根の上、川に浮かべたプラットフォームや最後ではまた川を使い、事前に撮った映像を混ぜながら音楽、ダンスなどのパフォーマンスが行われた。開会式典の部分もそれに組み込まれた。３時間４５分の間に、時に雨が強く降ったが、１２のテーマの出し物が演じられた。通しのリハーサルをやっていなかったが、順調にパフォーマンスは進んだ。

盛り沢山のパフォーマンスをごく簡単に紹介する。「ようこそ」や『薔薇色の人生』から始まり、ノートルダムの修復とメダル制作の「同時性」、オランジェリーを背景にしたフランス革命で勝ちとった「自由」、共和制のもとでの生まれを問わない「平等」、１０人の女性像を紹介する「友愛」、映像の中に国立図書館での愛やルーブル美術館での『モナリザ』盗難のアニメなどの場面も登場する。そしてグランパレの屋根の上で国歌ラマルセイユーズが朗々と歌われ、開会式のセレモニーが始まる「音楽」。水上庭園でのＧＭＸやブレーキングといった「スポーツ」、ファションショー、ＬＧＢＴＱのダンス、酒の神デイオニュソスの目覚めなどの「祝祭」、戦火に包まれるピアノを伴奏に『Imagine』がうたわれる「暗黒」、それからあいさつ・開会宣言（「セレモニー」)、そして騎士が会場に聖火を運び（「連帯」)、これをフランスサッカー界の英雄・アルジェリア系のジダンそしてテニスのナダルや陸上のカール・ルイスなどのかつてのチャンピオンたちがチュルリー公園にまでボートで運び、リレーの最後に点火された気球が空に浮き、エッフェル塔では『愛の讃歌』がうたわれる（「永遠」)。

これらのパフォーマンスはそれぞれに面白いが、展開が早く、テーマとの関係がよく分からないところもある。特に音楽はこちらの知識が少なく初めてのものもかなりあり、後日、スポティファイのプレイリストを聞いてみた。中継した日本人のアナウンサーはパフォーマンスの説明をあまりせず、You Tube で後日みたアメリカのＴＶ中継ももっぱら選手団の紹介にとどまっている。録画を見直し、フランスの新聞の中継記事で補足しつつ、その内容を把握した。

（４）この一連のパフォーマンスをどう評価すべきだろうか。

いつもの大会では選手団の入場にあまりにも時間がかかるので途中で興味がそがれるが、今回は多くのパフォーマンスや映像を楽しむことができた。逆に、

短時間しか映されなかった選手たちはどう思っていたのかが気にもなった。

いくつかの場面に対して、海外や国内から批判が上がった。ホモによるダンスや裸で立ち上がる酒神の場面では、アラブ諸国やオーストラリアの放送局は放送の中継を中止したと伝えられた。また、その場面がダビンチの『最後の晩餐』のパロディで、キリスト教を冒涜したとの強い批判がフランスの教会組織から文書で出され、ＩＯＣは不快感を与えたとしたら謝罪すると表明した。開会の数日前にマドレーヌ寺院で大司教が大会の無事を祈るミサを行い、それにはＩＯＣバッハ会長夫妻やオリンピック大臣、パリ市長が出席している。私個人はパロディと感じなかったし、芸術監督も『最後の晩餐』に想を得たのではないと言っていたが、聖職者からの批判には対応せざるを得なかったのであろう。この監督は、表現の自由があり、フランスの共和制の中で認められている範囲内だと、翌日の記者会見で反応したが、脅迫のメールがその後山ほどきたらしい。

フランス革命でマリーアントワネットらしい女性が切られた自分の首を持つ場面にもフランス国内の保守派から批判があった。

マリ出身の人気のフランス人女性歌手の Aya Nakamura（日本語を名前に使っているが、両親と共にマリからフランスへ来た移民出身）が金色の衣装をつけ、『DjaDja』の一節に（シャルナブールの言葉を載せて）歌う場面。制服の共和国音楽隊がそれに合わせて演奏し、スイングし、彼女は最後に敬礼をする。フランス語とマリやアラビアの言葉などを混ぜて歌う彼女の出演には早くから極右政党である国民連合 ＲＮ からの反対があった。見ていたマクロン大統領が En même temps 両方が共存するとショートメールしたのが、ネットの画面に映し出された。

フランスの夏の夜のショーに、お城などを背景に行われるソン・エ・リュミエール（音と光）がある。それと比べると一連のパーフォマンスは遥かに盛り沢山で、テーマが現代的でテンポが非常に早い。フランスの歴史や現代、それと文化にある程度の知識があると楽しめる。諧謔味もあり、ホモやヌードが登場し、フランスらしく大人向けである。

私は演出の仕方を含め、全体になかなか面白いと思ったが、ちょっと露悪趣味だと感じたところもある。歌手たちがきているドレス、特にカルダンが制作したらしい大きな会場用の長く裾を引くドレスにも目を見張った。大人数でのダンスはリズムが良く楽しめた。周りの友人・知人たちに聞いてみると、特に若い人は時差の関係もあり、ほとんど見ていない。残念だが、オリンピック離れという

ことかもしれない。開会式は選手の入場がメインであとは所詮付け足しという受け止め方もある。

フランス以外の国ではあまり評価されなかったかもしれない。世界には王政の国がかなりあり、ＬＧＢＴＱがまだ違法で、社会的に認められていない国もあるし、裸体の放映も同様である。表現の自由は重要だが、国により社会によりある程度の規制は実際上仕方がない。フランス革命が今のフランスを作り、自由・平等・友愛を産んだことを頭で理解していても、流血やギロチン刑に抵抗を覚える人もいる。保守的な日本はでこうした事情や他国への配慮をするが、フランスは容赦なく歴史と自由を表現する。フランスという国が世界で評価される一方で、嫌われるところもある所以かもしれない。

（５）開会式でスポーツとは関係がないテーマを長く取り上げたとの批判もあるが、ホスト国はこれまでもそうしており、１世紀ぶりのオリンピックという機会を使って現代のフランスを世界中の視聴者に見せることには十分な意義がある。他にはこのような場がほとんどないであろう。多方面からの期待とプレッシャーもあった中で組織委員会はそう考え、芸術監督は外部の専門家の協力を仰ぎ、２年前から準備してきた。

そのひとりである歴史家のパトリック・ブシュロン（Patrick Boucheron）は『L‘histoire mondiale de la France』の編者である。同書を少し読むと、氏はフランス革命を高く評価し、多民族・多文化の混淆（métis）に現代フランス社会の特性を見出している。もう一人のメンバーたるレイラ・スルマニは、フランス人の血も入っているモロッコ生まれのマグレブの女性、移民先のフランスで大学を出て、ジャーナリズムの分野で活躍。『ヌヌ』で２０１６年ゴンクール賞受賞をとった女流文学者でもあり、フランコフォニー（フランス語普及）担当大統領個人特使をもつとめている。外国人を受け入れ、女性がさまざまな自由を享受するフランスを評価し、愛を強調する点には彼女の影響力があろう。

社会の分断が目立ってきた最近のフランスにおいて、国民の中心的な層を占める、極右勢力を除いた多くのフランス人にとって、開会式のスペクタルが描いた現代のフランスの姿に大きな違和感はないようである。翌日発表された世論調査では８割が開会式を評価していた。

（６）フランスは第二次大戦しばらくまではヨーロッパの移民・難民を多数受け

入れたキリスト教徒の皮膚の色が白い人が中心の国だったが、オリンピック競技の選手や開会式・閉会式に登場した音楽家やダンサーを見て感じるのは、今や国は様々な民族からなり、皮膚の色も白、黒、焦茶と様々で、多様性が広がっていることである。ファイナンシャル・タイムズのパリ駐在の Sinon KUPER の近著『Impossible City: Paris in the 21st Century』(2024)を読むとそのあたりがよく理解できる。

歌手は開会式の冒頭のレディ・ガガはアメリカ人、最後のセリーヌ・ディオンはケベック系カナダ人。途中で登場したアヤ・ナカムラはマリ系、グランパレの屋上でラ・マルセイエーズを歌ったサンシレルはグアドループ出身、閉会式最後の『My Way』のイズーはカメルーン系、パラリンピック閉会式の冒頭に歌ったサンタはアメリカ人とフランス人との血を引く。柔道のリネールはグアドループ出身。こうしたことにいちいち触れることが無意味なほど、フランスは人の面で国際的になっている。

私は近著『パリ二十六景』（２０２４年）のなかで、フランス革命やその後の共和主義の成果ともいうべきライシテ(信仰の自由を守るための政教分離)が社会の中心的な規範になる中で、フランスではカトリック信者が今や半分を割り、プラクティスをする信者は３割程度にまで下がったという数字に言及した。現代のフランスは統計にも表れているが、実に多様な民族が住み、多種の宗教を信じ、文化の面でも様々な混淆や並立が進んでいる。そうしたことがうまくいけば、国は国際的になり、オリンピックなどスポーツ分野での活躍にも、文化面での広がりや深みにもつながる。

しかし共和制のもとでの自由・平等・友愛というという一種の理想のもとに異質の文化を持つ人々を受け入れ、緩やかな同化を図るには多大の努力が必要であろう。いわゆる白人が中心にとどまり、その他のフランス人は主に労働力として位置付けられるのであれば、社会の軋轢は当然増すであろう。幸にして、多様な人種や文化はグローバルな時代のフランスを強く、豊かにしている。

白人を中心としてキリスト教文化に馴染むフランス人は依然として社会の多数を占める。その中でも移民を排斥し、国際協調に批判的な層は極右政党のＲＮを支持し、この６月と７月の総選挙ではＲＮは３分の１を超える票を獲得した。欧州全体で移民への規制が強まる中で、フランスも保守的な移民政策に転じていくのであろう。

今回のオリンピックを通じて誇りを感じたフランス人が多いと報道されてい

る。日頃悲観的かつ批判的なフランス人が、予想を上回るフランスの選手の大活躍でラマルセイエーズを歌って応援した。それと同時にスペクタルが伝えんとしたメッセージ、グローバルな世界の中でのフランスのあり方について共感し、同意したとみて良いのであろう。

ＮＹ Times は閉会式後の７月２９日の記事 Olympic Ceremony put a changing France on Full Display で新しい Frenchness が示されたと好意的な記事を書いている。

(７)日本でもう少し伝えられるべきだと思われたのは、パリとサン・ドニを主な会場としたことの意味である。サンドニ地区はパリの北部のいわゆる「郊外」。ペリフェリック（環状道路）のすぐ外、ドゴール空港をこえ、ベルギーまで伸びる高速道路Ａ１に面す。３世紀に聖人（サン・）ドニがドルドイド教徒をキリスト教に改宗させた罪で首を斬られ、それを持って歩き、息絶えたという言い伝えがある。その場所にその後聖堂が建てられ、ブルボン王家の廟もそこに置かれている（ルイ１６世もマリーアントワネットも最終的にそこに眠る)。金属工業などの工場が近くに多く、その地区には移民出身の労働者や貧困層が数多く住み、犯罪率の高さや治安の悪さでも知られている。

私は４０年以上も前に大聖堂を家族で見学に行ったことを思い出す。帰りが夕方になり、周辺は色の黒い若者が屯しており、思わず妻と共に身を固くし、子供達の手を強く握り、駐車場に急いだ。

そうしたサン・ドニ（行政上はコミューン、町長は社会党）にオリンピック・プールを建設したのは、大会後には泳げない地域の青少年に水泳の機会を与える目的だと説明されている。隣接する川に面した地区にあるオリンピック村は大会の終了後の２０２５年中には、６、０００人の民間住宅と同じ規模のオフィス用とに分譲され、新しい大きな町ができる。スタートアップ企業も来るだろうし、一定割合を低収入者用のソーシャル・ハウジングにする計画になっている。ペリフェリックの内側のポルト・ド・ラ・シャペル地区は並木を整備したグリーン・シティになる。

地下鉄の延伸・新駅建設を柱に、オリンピックのレガシーとしてパリと郊外のサンドニ地区との結びつきを増やし、置き去りになっていた「郊外」を発展させ、同時にパリ市内が豊な人たちだけのものなることを防ぐ狙いもある。

９月８日のパラリンピック閉会式は、『Vivre pour le Meilleur(もっとよくなるために生きよう)』というジョニー・アリデイの愛を歌う曲で始まった。選手や国旗が入場すると、喝采で迎えられたエスタンゲ会長は「アスリートたちに大きな拍手を」と促し、会場からは拍手が長く続き、４万５千人というボランティアにも感謝を述べた。オリンピックについては、大会期間中にＩＯＣとフランス組織委員会が成功だと共同で記者会見した。スイス・ローザンヌ大学の経営学者がパリ・オリンピックは今後の一つのモデルになろうと書き、ＩＰＯパーソンズ会長も終了後に、今後のパラリンピックはパリ大会が一つの水準となるだろうと発言した。オリンピックを組織化し、運営してきた多くの関係者やフランス人にとって嬉しい言葉であろう。

閉会式は途中から「パリはお祭りだ Paris est une fête」というメッセージが出て、スタッド・ド・フランスはナイトクラブの様になった。エレクトロ・ミュージックはクラブやディスコを愛するフランスが育てた。ＤＪではジャン・ミッシェル・ジャールや２０人以上のミュージシャンが登場し、途中からは一人２分で次々にパーフォマンスをする。英語の歌が圧倒的である。フランスの選手たちがついにステージに上がり、歌手を取りまき、声を合わせ、踊り、そうしてカメラが引き、中継は終わる。

このあとは明け方まで二次会が続いたことであろう。いかにもフランスらしい終わり方である。翌日のルパリジャン紙は一面に『遺産（エリタージュ、レガシー）を誇りに』と大きく掲げた。遺産は色々あるが、オリンピックで国民が一体になったことが何よりの遺産であろう。

９月１４日には選手やコーチ、組織委員会関係者、ボランティアなどが参加し、７万人が集まったオリンピック/パラリンピック・パレードがシャンゼリゼで行われた。フランス人にとってオリンピックという夏のお祭りが終わった。

９月５日には新首相に共和党のベルニエ氏がマクロン大統領により任命されている。国内は総選挙に表れたように、政党間の対立や国民層の分断が大きくなり、大統領の指導力に翳りが広がっている。フランスは持続性のある内閣をこの秋に組成できるのだろうか。

（１５０９２０２４）